

6. 無黄疸にて発見された膵頭部癌の例

渡辺 栄, 高橋 淳, 宮城三津夫
朝比奈信武, 小林康弘 (県立東金)

上腹部痛で発症した無黄疸性膵頭部癌について, 種々の画像診断検査を施行し, 当初手術可能と思われたが, 浸潤範囲が広く手術適応なしとなった症例について, 若干の考察を加えて報告した。本症例では腹部エコーが発見の契機であり, 膵癌における腹部エコーの重要性が再認識され, 浸潤範囲の決定には, 種々の検査を組み合わせる必要がある。膵癌の早期診断の難しさを改めて痛感させられた症例であった。

7. 著明な黄疸を呈した原発性アミロイドーシスの1例

中村 全, 大槻俊夫, 川口 光
福永和雄 (キッコーマン総合)

症例は69歳の男性。肝機能障害と鼻出血を主訴に来院。原発性アミロイドーシスと診断されるが, T-B が入院時2.5mg/dl より死亡時23.5mg/dl まで上昇, 著明な黄疸を呈した。組織学的には, Disse 腔に多量のアミロイド沈着があり, これが肝細胞索の圧迫萎縮をおこし, 周囲の胆細管に何らかの障害を与え黄疸を招来するものと推定された。

8. ウルソデオキシコール酸にて症状改善のみられた原発性胆汁性肝硬変の1例

菊野 薫, 土屋聖二, 後藤信昭
黒野 隆, 林 良明, 永井 順
(沼津市立)

症例は53歳の女性, 黄疸・痒疹を認め, D-ペニシラミン, 副腎皮質ステロイド, コルヒチン, アザチオプリンによる治療を行うも効果なく AL-P 27.0 K-A 前後, T-Bil 6.0mg/dl 前後であった。ウルソデオキシコール酸投与を開始したところ AL-P 17.0 K-A 前後, T-Bi 1.8 mg/dl 前後まで改善, 痒疹も消失した。また他に2例の無症候性原発性肝硬変にも投与を試みたところ AL-P値の改善傾向がみられ, 今後使用を検討できる薬剤であると思われる。

9. タウリンが著効を呈した胆汁うっ滞型肝炎の1例

牧野康彦, 中山隆雅, 檜山義明
明星志貴夫 (川鉄千葉)
岩崎正彦 (千大)

症例は39歳の男性。cefudroxil および kyorin AP-2

服用2週間後より, 発熱, 発疹, 皮膚掻痒感が出現し, 好酸球増多と肝機能異常を認め入院。入院後黄疸が遷延化したため, 薬剤性の急性肝内胆汁うっ滞と考え, プレドニゾロン, フェノバルビタールを投与したが無効。含硫アミノ酸の一種で胆汁分泌促進作用があるとされるタウリン12g/日投与しすみやかな減黄をみた。タウリンは胆汁うっ滞型の肝炎に試みてよい治療法と思われる。

10. IFN 治療を行った e 抗原陽性慢性肝炎5症例の経験

夏木 豊, 本村八恵子, 野口武英
大野孝則 (船橋中央)

B型肝炎の慢性化, 持続感染への進展を断ち切る方法として, 抗ウイルス療法を試み, IFN- β を e 抗原陽性慢性活動性肝炎患者5名に長期連続投与した。投与後6か月以下の成績であるが, e 抗原の陰性化を一例認め, 抗ウイルス効果として, 全例に DNA-P の著明改善を得られた。3例に投与後の GPT の正常化を認め, IFN- β 療法は有用と考えられた。

11. 肝硬変症で突然死をきたした1例

古田由加, 武者広隆, 杉田周次郎
森 博志 (国立千葉)
高澤 博 (同・研究検査科)

症例は47歳男性, 昭和47年に健診で HB (+) の肝障害を指摘されている。昭和60年7月から, 肝性脳症, 発熱などを繰り返す。62年2月, 食道静脈瘤破裂で入院。内視鏡的硬化療法にて静脈瘤消失し, 経過良好であったが, 突然下腹痛を訴え, 死亡した。剖検の結果, 左腎の血管筋脂肪腫の破裂による後腹膜腔内への大量出血死が, 死因であった。

12. 急性腎盂腎炎による急性腎不全の1治療例(抄)

土田弘基, 粒良幸正, 佐藤慎一
(国立佐倉)

慢性維持透析の原因疾患として, 慢性腎盂腎炎は第4位を占める。この慢性化を考察する参考となる症例を経験した。48歳の女性。膀胱炎症状から腎盂腎炎症状を呈し, 急性腎不全に陥った例である。検索の結果, 尿流障害のない肺炎桿菌による急性腎盂腎炎として治療し, 軽快した。腎機能が1/3に低下したまま欠損治癒した。前後の腎生検像で, 急性炎症像から慢性炎症像と推移した。今後, 慢性腎不全となるか否かが興味を持たれる。